



情報を編集するということ

独立行政法人メディア教育開発センター 堀田 龍也

小学校では、たとえば遠足の作文の書き方で以下のような指導場面がある。

「朝、7時に起きて、顔を洗って弁当を持って、学校に行きました。運動場に集合して、バスに乗って、〇〇山に着きました。みんなで遊んだ後、お弁当を食べました。そのあと、バスに乗って学校に戻りました。とても楽しかったです。」

多くの教員は、このような作文の書き方はよくないことだと教える。たとえば次のように指導する。

「一番心に残ったことは何ですか？ その部分を際立たせて表現しなさい。」

「みんなが体験したようなことは書かなくていいんです。あなただけが知っていることを書きなさい。」

小学校高学年になると、こんな指導もある。「一番心に残ったことを作文の冒頭に持ってきたなさい。その後、当日までの苦労を書きなさい。」

どちらかといえば、全体を時系列に書くことはいいことではないとされるのだ。クライマックスの部分に焦点化して書き、クライマックスに関係のない場面は割愛するように教えている。ほかの人が知らないことを中心に書くようにとも教えている。さらには、必要に応じて時間的な倒置法を使うようにも教えているのだ。

もちろんこれは、学習指導要領で位置づけられた国語科の正式な学習内容である。日本語を表現のツールとして扱っていく私たち

が、小学校高学年段階で身につけなければならない最低基準であるとされている学習内容なのだ。

私たちが自己紹介をするとき、自分のすべてを話すことなど到底できることではない。自己紹介は短い方がよいとされ、ちょっとぐらい脚色しても、相手に覚えてもらえるように工夫することが求められる。日記を書くときも、その日に起こったすべてのことを書くことなど所詮無理であり、現実の体験から書く内容を「切り取る」ことになる。デジカメで撮影するときには、デジカメのフレームの外のもものは撮影できない。やはり必然的に「切り取る」ことになる。

人に情報を伝えるときには、所詮すべての情報を伝えることなどはできない。だから、必ず事実の一部を切り取り、編集をして情報提供するしかない。それは、自己紹介でも日記でも作文でもデジカメでも同じことで、情報伝達における必然であり宿命である。

「全体」か「一部」か。誰かが誰かに情報を伝えるという営みにおいては、この軸が「全体」に振れきることはあり得ない。必ず「一部」となる。しかし、その「一部」は、どのような意図で「全体」から切り取られたのか。そのことを追求する姿勢が必要だ。それが無い限り、「全体」を見据える姿勢が育たず、メディアに振り回される人になる。

ほりた たつや 文部科学省参与などを併任。政策立案から教育現場の実践指導まで、情報教育に関するあらゆる場面に精力的にかかわっている。